

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320023

研究課題名(和文)《主体性》概念を基軸とした日本近代化過程における《自己》造形に関する学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary research on the production of "self" during the period of Japanese modernization through the concept of "shutaisei"

研究代表者

伊藤 徹 (Ito, Toru)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：20193500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語としての「主体性」の概念の成立と使用の歴史を、哲学、社会思想、文学、美術、演劇、建築など多様な分野において、追跡したものである。それによって、日本が近代化に伴って経験した人間理解の変化を、多様なアスペクトにおいて解明することができた。また海外の日本文化研究者との共同研究および出版事業を通じて、日本におけるテクノロジーの発展と文化との関係についての知見を国際的に発信することができた。

研究成果の概要(英文)：This research followed the history of the Japanese philosophical concept known as "shutaisei" (subjectivity) through an interdisciplinary approach, in the fields of philosophy, literature, arts, drama, architecture etc. Consequently it clarified in various aspects the change in self-understanding that the Japanese people received through modernization for a century and a half. Additionally it explored the consequent relationship between culture and technology. This project was also approached internationally in cooperation with non-Japanese researchers of Japanese culture.

研究分野：哲学・精神史

キーワード：思想 美術 文学 主体性 近代化 テクノロジー

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、2006年度から2年間継続したサントリー文化財団による助成に基づく共同研究「1910 - 30年代日本における《作ること》の諸相とその精神的意味」(研究代表者:伊藤徹)、さらに二つの基盤研究(B)、すなわち平成19年度「作ることの視点における1910-40年代日本近代化過程の思想史的研究」(19320019)、同21年度「1890 - 1950年代日本における《語り》についての学際的研究」(21320021)を引き継ぐ形で企画された。一連の研究は、近代化の動向である科学技術化を《作る(ポイエシス)》という人間の根本可能性の先鋭化として捉えた上で、日本近代の社会・文化の展開過程を、多ジャンルの人文社会科学の研究者からなるグループによって学際的に考察することを共通の性格としてきた。それは、近代化が文化全体を貫く普遍的動向として学際性を要求することもさることながら、ともするとジャンルのノモスに捉われがちな知の在り方を絶えず反省しなければならないという自覚に基づくことでもあった。持続的な研究活動は、こうした志向を共有する参加者を加え、本研究を構想する際の基本的なスタッフを構成した。

### 2. 研究の目的

本研究は、《作ること》の先鋭化としての科学技術化への眼差しを基礎とし、近代化の中心概念である「自己」が日本の近代化のなかでいかに形造られてきたのかを、《主体性》概念を機軸として、19世紀末における淵源から1970年代の空虚化に到る過程を辿ることによって、第二次世界大戦敗戦を境とする日本の精神風土の断絶と連続とを、政治学、経済学、歴史学、建築、美術工芸、文学、演劇、哲学の各分野を横断するかたちで思想史的に明らかにすることを目的とした。それによって高度経済成長期の思想史的研究への着手点を確保するとともに、日本による植民地支配とその崩壊とを経験した海外の知識人層における自己のアイデンティティーの形成過程などと比較検討することによって、日本思想史の視野の拡大を目指した。さらに日本思想史研究を国際的に発信すること、受信することも目的の一つに加えた。

### 3. 研究の方法

- (1) 京都工芸繊維大学造形工学部門・伊藤研究室内に運営センターを設置し、情報の集積・交換、その他事務手続きなどを行なった。
- (2) 4つの研究グループ(社会との関係における自己 造形芸術における自己 フィクションの産出と自己 哲学的反省と自己)に研究分担者・協力者を配置して、情報収集と分析を行なった。さらに国際的発信のために海外共同研究者、研究の継続的発展と補助のために若手研究協力者を加えた。
- (3) 総計12回の会合をもち、情報の共有化ならびに全体での検討を行ない、それを基に論

文、口頭発表、著書などのかたちで成果を公表した。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、明治後半から戦後に到る日本の近代化過程のなかで人々が、自己自身のイメージをどのような形で産出していったのか、その具体相を明らかにしたところにある。扱われた知識人・芸術家を挙げるならば、以下のとおりである。

荒正人、石川淳、伊東忠太、井出薫、稲垣足穂、今泉定助、梅本克己、大川竹雄、岡本太郎、亀井勝一郎、九鬼周造、小林秀雄、瀧口修造、田中英光、田村俊子、陳澄波、鶴見俊輔、寺山修司、東郷青児、東野芳明、戸坂潤、西谷啓治、服部之総、針生一郎、二葉亭四迷、星野輝興、松本竣介、真下信一、丸山真男、三木清、宮川淳、村上重良、村野藤吾、柳宗悦、山崎正和、与謝野晶子、吉田鉄郎、和辻哲郎など。

成果の具体的内容は、公表された論文・著書などによるほかないが、大略を述べれば、次のとおりである。

あらゆるものの有用化としての近代化・科学技術化がもたらした旧来の生の地盤の喪失は、その空白を自ら生み出した虚構によって埋めようとする動きを人間存在に対して要求するようになった。本研究が「主体性」概念の基本構造として明らかにしたのは、自己の地盤の表象を自ら創出する、そうした生の在り方である。《主体性》という言葉そのものは、1930年頃 Subjektivitet の翻訳語として現われるとしても、地盤のない自己が虚構を以て自己を支えるという、この構造に着目するならば、その淵源は、明治日本が近代国家としての体を備えるようになった1890年前後にまで遡ることができる。

本プロジェクトに属する個々の研究は、この水源域から流れ出た自己造形の運動が生み出すさまざまな光景を、明治末期から大正にかけての個人主義、戦前昭和期の Kommunismus や民族主義、あるいは戦後民主主義と二つの安保改定を経過してのその変容などをエポハールに意識しつつ、また当然ながら学際的に明らかにしたわけである。自己造形のそうした流れを辿ってみると、そこには細かな差異が見出せるのであり、その摘出記述が研究の実質を形造ったといつてよい。

一、二例を挙げれば、「個人」という存在に価値を置くことによって、空白を埋め合わせたという点では、20世紀初頭に現われた夏目漱石も『白樺』派も同様であるが、過去のものとなった家共同体に基づく「明治日本」というもう一つ別の虚構に対しては、これへのノスタルジーを森鷗外とともに共有した漱石と、この虚構を対立極として、「人類」に直接つながる「自己」イメージを構成した『白樺』派とでは、本質的に異なっている。また戦後1950年代から70年代に主体性のジャンルゴンを共に口にした岡本太郎と寺山修

司の間には、直接のコンタクトがあったが、二人を比較してみるならば、虚構された地盤への関わりのちがいが、明らかになる。ごく簡潔に言えば、それは、虚構を生み出す力に対する楽観的信頼をもつ前者と虚構がこの力に宿命的にまわりつくことを自覚していた後者というかたちで、明らかになる。

他にも見出しうる精神的差異に目を凝らすことによって、虚構そのものが生み出されるもう一つ深い場所も見えてくる。それは一般的ないい方をすれば「時間」だが、それ自身捉えられないこの現象にいかにかたちを与えるのが、人間的生の造形のもっとも基本的な層をなす。このことが、今回の研究によって得られた基本的な見解であり、次に課された研究課題の核心をなすことともなった。

加えて、形式的な側面とはなるが、成果と見なすべきこととして、本研究がもう一つ意図した研究成果の国際的発信に関して、以下3点を挙げておきたい。

まず第一に、非日本語による学術論文を少なからず、生み出すことができたのは、報告に値することと思われる。その内のいくつかは、下記5「主な学術論文等」に挙げたが、2015年3月の時点では、間に合わなかったものの、代表者が海外研究協力者二名とともに編纂し、代表者ならびに分担者二名とともに執筆参加した論文集 *Wort und Bild Assimilation/Japan und Moderne* が近くベルリンの書肆から出版される。また代表者ならびに分担者三名の論文が中国語に訳され、中華民国で公刊される計画が進んでいることも付記しておく。

国際的発信の成果として二点目は、上記論集のもととなった国際会議をチューリヒ大学で行ったこと、さらに国立台湾大学芸術史研究所との共同企画として、二回の研究会合を中華民国の研究者とのシンポジウムのかたちで同大学で行ったことである。後者は、今後とも持続的に共同研究を行っていく予定である。代表者、分担者による招待学術講演も、数多く実施することができたが、これも共同研究の地盤確立に寄与したこととして、挙げておきたい。

三点目は、海外研究協力者5名(ドイツ、スイス、中華民国、韓国)を招待し、会合で研究報告を受けたことである。内1名チューリヒ大学准教授シモン・ミュラーは、二カ月日本に滞在し、京都工芸繊維大学国際訪問研究員として共同研究を行なう一方、研究成果を獨協大学、名古屋大学などでも講演のかたちで公表した。またレーゲンスブルク大学准教授ロビン・レームの科研会合での報告は、論文のかたちに改稿され、社会芸術学会機関紙『社芸堂』第2号で公刊された。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計64件)

伊藤徹、Yanagi Muneyoshi/Eine Kunsttheorie im technischen Zeitalter, *International Yearbook for Hermeneutics / Internationales Jahrbuch für Hermeneutik* 2014, 査読有、13号、2014、208-224

伊藤徹、主体性の概念とその淵源、京都工芸繊維大学学術報告書、査読有、7号、2014、13-25

秋富克哉、On the possibility of discussing technology from the standpoint of Nishitani Keiji's religious philosophy, *The Journal of Japanese Philosophy*、査読有、2号、2014年、57-72

平子友長、三木清『構想力の論理』における構想力の概念とその活用、日本の哲学、14号、2013、62-76

長妻三佐雄、ナショナリズムと多様性の思想 三宅雪嶺における有機体的国家論の展開、『政治思想研究』、12号、2012、114-134

西川貴子、「虚」か「実」か 『文芸春秋』懸賞実話と橘外男「酒場ルーレット紛擾記」、日本文学、査読有、62-11号、2013、24-34

平芳幸浩、瀧口修造の1930年代 シュルレアリスムと日本、美学、査読有、243号、2013、61-72

ほか

〔学会発表〕(計51件)

伊藤徹(招待学術講演)、The concept of *Shutaisei* and its origin(招待学術講演)、2012 10 17、エジンバラ大学(連合王国)

伊藤徹、Dekonstruierte Vergangenheit/ Das Selbstsein in den Filmen Terayama Shujis(招待学術講演)、Vortragsreihe Zoom Film+Kunstgeschichte、2014 11 5、レーゲンスブルク大学(ドイツ)

荻野雄、Die Logik des politischen Engagements bei Ikutaro Shimizu(招待学術講演)、Wort und Bild Assimilation—Japan und Moderne、2013 10 16、チューリヒ大学(スイス)

平芳幸浩、How could (or could not) Surrealism be implanted in Japan? TAKIGUCHI Shuzo in the 1930s(招待学術講演)、Wort und Bild Assimilation Japan und Moderne、2012 10 12 チューリヒ大学(スイス)

若林雅哉、自主規制という商業戦略：現代日本のアニメーション(招待学術講演)、2015 3 10、明志科技大学(台湾)

ほか

〔図書〕(計33件)

昆野信幸ほか、岩波講座日本の思想 第1巻、岩波書店、2013、302

長妻三佐雄ほか、岩波講座日本の思想 第

2 卷、岩波書店、2013、309

日比嘉高、ジャパニーズ・アメリカ 移民  
文学・出版文化・収容所、新曜社、2014、392  
松隈洋、残すべき建築 モダニズム建築は  
何を求めたのか、2013、287

宮野真生子、なぜ、私たちは恋をして生  
きるのか-「出会い」と「恋愛」の近代日本  
精神史、ナカニシヤ、2014、238  
ほか

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 徹 (ITO, Toru )  
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号：20193500

### (2) 研究分担者

荻野 雄 (OGINO, Takeshi )  
京都教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：50293981

昆野 伸幸 (KONNO, Nobuyuki )  
神戸大学・国際文化学研究科・准教授  
研究者番号：00374869

平子 友長 (TAIRAKO, Tomonaga )  
一橋大学・社会学研究科・教授  
研究者番号：50126364

長妻 三佐雄 (NAGATSUMA, Misao )  
大阪商業大学・総合経営学部・教授  
研究者番号：80399047

笠原 一人 (KASAHARA, Kazuto )  
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教  
研究者番号：80303931

平芳 幸浩 (HIRAYOSHI, Yukihiro )  
京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・准教  
授  
研究者番号：50332193

松隈 洋 (MATSYKUMA, Hiroshi )  
京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・教授  
研究者番号：80324721

西川 貴子 (NISHIKAWA, Atsuko )  
同志社大学・文学部・教授  
研究者番号：20388036

日比 嘉高 (HIBI, Yoshitaka )  
名古屋大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：80334019

若林 雅哉 (WAKABAYASHI, Masaya )  
関西大学・文学部・教授  
研究者番号：30372600

秋富 克哉 (AKITOMI, Katsuya )  
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号：80263169

宮野 真生子 (MIYANO, Makiko )  
福岡大学・人文学部・准教授  
研究者番号：40580163

### (3) 連携研究者

なし